



サイエントロジー

南アフリカの宗教

デビッド・キデスター
比較宗教学教授

ケープタウン大学
南アフリカ

1995年10月



サイエントロジー

南アフリカの宗教

サイエントロジー
南アフリカの宗教

目次

I.	はじめに	1
II.	宗教の認識	3
III.	宗教的信仰	5
IV.	宗教儀式	7
V.	宗教倫理	9
VI.	宗教的経験	10
VII.	宗教団体	12
VIII.	南アフリカにおけるサイエントロジー	13
IX.	参照ノート	16



サイエントロジー 南アフリカの宗教

デビッド・キデスター
比較宗教学教授

ケープタウン大学
南アフリカ

1995年10月

1.はじめに

宗教はとりわけ、神聖な時間と空間をもたらそうとする、人間の独特な試みです。宗教は、特別な祝賀や祝祭、記念に対し、教暦上に祝日を定めています。宗教は特別な種類の儀式を配慮して、神聖な場所、つまり崇拜場所、集会場所、巡礼場所なども定めています。人間は、神聖な時間と空間に参加することによって、世界中で宗教的責務を果たします。

すべての宗教は「新しい宗教のムーブメント」でさえ、時間と空間を神聖なものにする方法を見付けます。例えば、サイエントロジー教会の国際的な宗教カレンダーにおいて、11月11日は、1957年にヨハネスブルグで設立された、南アフリカ初のサイエントロジー教会の設立を祝い、「南アフリカ、全国創設日」に指定されています。サイエントロジーに関する講演は、1955年の初期にヨハネスブルグで開催されましたが、そこで最初の教会が創設され、南アフリカにおけるサイエントロジーの組織立った宗教生活が開始されました。

その10年後、教会は南アフリカ政府からの反対に遭遇しました。保健省の保護のもと、1969年4月から1970年12月にかけて、正式な政府調査委員会が招集され、サイエントロジー教会の調査が行われ



ました。同委員会は、1972年に報告書を提出し、サイエントロジーは南アフリカの教会や宗教として合法的に認められるべきではない、という勧告を出しました。

しかし、この委員会の勧告にもかかわらず、サイエントロジー教会は非営利団体として登録することができました。サイエントロジーの国際的な宗教カレンダーにおいて、1月16日は、1975年に南アフリカでサイエントロジー教会が非営利団体として認められたのを記念して、祝日として「アフリカでの承認日」と記されています。しかしサイエントロジーが、南アフリカにおける**正真正銘**の宗教として世界の他の地域でも受け入れられたことを受け、この教会は完全な法的承認を待っています。そうなれば、サイエントロジー教会の国際的な教暦に新しい休日が増加されるかもしれません。

神聖な空間をもたらす際に、サイエントロジー教会は、この国の大都市のほとんどの地域で礼拝の場を設けました。サイエントロジー教会は、ヨハネスブルグの最初の教会に続いて、1961年にケープタウン、1962年にポートエリザベス、1963年にダーバン、そして1968年にプレトリアで設立されました。ヨハネスブルグには、1981年に、もうひとつの教会ヨハネスブルグ北部が設立されました。他の神聖なる場所と同様、これらの教会は特別な種類の宗教活動の場です。これらの教会の叙任された聖職者は、日曜日の説教、聖職者カウンセリング、結婚式、洗礼式、葬式の儀式など、幅広い宗教サービスを提供し、これらの場をサイエントロジーの宗教的生活の中心にしています。

ですから、他の宗教と同様、サイエントロジーは神聖な時間と神聖な空間を生み出す、人間による独特の試みです。とはいえ、また他の宗教と同様に、サイエントロジーは、人間に対する人間による独特の試みです。教会独自の定義によると、サイエントロジーは「応用宗教哲学で、その目標は、個人を精神的存在として、そして宇宙全体との関係において、自分自身と自分の人生の理解に導くこと」です。¹つまり、サイエントロジー教会は、人生の神聖で超人的な側面に関連して実現される、宗教的な人間の道を発展させます。

宗教の標準的な学術定義は、宗教的世界の超人的または宗教的特徴に焦点を当てる傾向があります。宗教を定義する試みは、19世紀の人類学者であるE. B. タイラーにさかのぼることができ、宗教は本質的に超人間的な超越との関わりになります。これらの条件により、宗教とは精神的、超自然的、超人的な存在に関連する一連の信念と実践であり、通常の人類の存在レベルを超えているものです。宗教を定義する別のアプローチは、社会学者エミール・デュルケームの業績にさかのぼることができます。宗教は、人間社会を統一する神聖な焦点に関連する信念と実践です。このような観点から、宗教は神話と教義の信念、儀式と倫理の実践、個人的な経験を通して、そして社会組織の形を通して、人生に神聖な意味と力を注ぎ込みます。²

確かに、1950年までに創設者L. ロン ハバードによってまとめられた、ダイアネティックスの精神的治癒技術から生まれたサイエントロジー教会は、標準的な定義に関する限り、宗教として定義することができます。しかし学術論議は、宗教の定義付けに関わる拒否や認知に対する政治的な力を無視する傾向があります。よって、サイエントロジーの宗教の基本的な特徴を概説する前に、南アフリカで宗教の認識が争われた歴史について、ここで簡単に説明する必要があります。

II. 宗教の認識

西洋の論文の中で、「宗教」という言葉は、常に問題とされてきました。その古代ラテン語の語源「religio」は、慎重に、忠実に、細部に細心の注意を払って本物の行動様式を指定しました。しかし、その本物の行動様式は、その反対の「superstitio」、つまり無知、恐怖、詐欺に動機付けられた行動と定義されました。言語学者エミール・バンヴェニストの観察によると、「宗教」の概念に触れる場合、反対の「迷信」に触れる必要があります。³必然的に、宗教と迷信、本物と詐欺、馴染みと奇妙の区別は、『私たち』と『彼ら』との間の基本的な対立となってしまいます。その対立において、本物の宗教は『私たち』と主張されますが、迷信、無知、恐怖、詐欺に基づく信念や実践は『彼ら』と見なされます。

アフリカ南部での、この宗教と迷信との概念的な対立は、アフリカ先住民の信念と実践に関して、ヨーロッパの報告書では長い歴史となっています。19世紀の間、ヨーロッパの観察者は、アフリカの宗教生活の形が「宗教」とみなされるべきであると認めることを拒絶しました。例えば、19世紀初め、アフリカ南部のロンドン宣教協会の最初の宣教師であるJ.T. ファン・デル・ケンプは、このアフリカ宗教の否定を実証しました。東ケープ州の人々について、ファン・デル・ケンプは次のように述べています。「宗教によって私達は神の崇拜、またはその崇拜が表現される外部行為を理解する。私は彼らが宗教を持っていることも、神の存在を知ることもして感じられない。」⁴明らかに、ファン・デル・ケンプは、東ケープ州の人々が本物の「宗教」を持っていたという事実を否定しました。代わりに、ファン・デル・ケンプは、アフリカ人は無知、恐怖、「迷信」の詐欺の下で苦しんだと主張しました。

このアフリカの信仰や実践を認識することを拒否することは、20世紀にも続きました。例えば、1920年代にアフリカーナ人類学者W.M.アイゼレンは、H.F.フルウールのバントゥー問題事務局で働き、1950年代の「大アパルトヘイト」の実施期間、アフリカ人は先住民族の宗教を持っていないと主張しました。「godsdien (宗教)」は、アイゼレンが主張したように、彼が「高められた文化」と呼んだもののだけのために取っておくべきだと主張しました。そのような文化が欠けていたため、アイゼレンによると、アフリカ人はゲルフォスホルム (形態や信念のパターン) を持っているかもしれないが、神は存在していません。⁵ その結果、このやり方によって、アフリカ南部のアフリカ人たちは、先住民族の宗教的遺産の明確な否定に苦しみ続けました。

「宗教」という言葉はとにかく問題を抱えてきました。英語では、「religions」という複数形で、1593年にプロテスタントの神学者リチャード・フッカーの著作の中で、その使用の最初の記録が見られます。現代の使用法とは異なり、フッカーはプロテスタントとローマ・カトリックという2つの宗教を区別するために「religions (宗教)」という言葉を使用しました。⁶ 明らかに、フッカーはプロテスタントとカトリックをふたつの宗教と見なしましたが、その後の思想家は、しばしばひとつのキリスト教と見なしました。18世紀には、宗教に関するヨーロッパの考え方が世界を4つの宗教 (キリスト教、ユダヤ教、イスラム教、異教) に分けました。異教は、古代、現代、「悪魔」と、さらに分けられることがありました。⁷ 1870年、F. マックス・ミュラーが比較宗教に関する入門講義を行った際、主要な宗教の数は、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教、ヒンドゥー教、仏教、ゾロアスター教、儒教、および道教の8つにまで拡大しましたが、マックス・ミュラーはそれ以外の重要な宗教のことを、固有の「書物のない宗教」と呼びました。⁸ もともとキリスト教を区分するために使われていましたが、宗教が多様化しても意味が通るようにするために、この用語「religions」が使われる頻度が増えてきました。⁹

20世紀には、「religion」と「religions」という用語は、宗教対立に巻き込まれ続けました。1960年代から1970年代にかけての「新宗教運動」の出現に対応するように、例えば反カルトのプロパガンダは、これらの運動の宗教的地位を、起業家的ビジネス、破壊的な政治組織、あるいは洗脳的な「カルト」として分類することによって否定しました。これらの方向性に沿う反カルト論争は、新宗教の学術的な分析に影響を及ぼしたように見えました。¹⁰

反カルトのプロパガンダによってある程度は知らされていたにもかかわらず、南アフリカ調査委員会は、1972年の報告書でサイエントロジーの宗教的地位を否定しようとしていました。南アフリカで正当な宗教と見なされるべきのものに関する、特定のキリスト教の仮定を強化することと、より関係していたようです。委員会によると、サイエントロジー教会は宗教ではありませんでした。なぜなら、それは人格神への適切な崇拝が見られなかったからです。「サイエントロジーは至高の存在を認めていると公言しているが、それを服従権と崇拝の権利を持つ支配的権力または人格神とは決して言及していない。」¹¹ 19世紀におけるキリスト教宣教師の、アフリカ宗教の否定を思い起こすことで、サイエントロジーに対する宗教的地位の否定は、本物の宗教として必要な信仰と実践の、適切な崇拝の形態に関する特定のキリスト教徒の前提に基づいていました。

1975年に出版された詳細な反論で、著名な南アフリカの宗教学教授G.C.ウーストハイゼンは、サイエントロジストが「神聖な牛や猿の神、象の神、蛇や蛙の前で、お辞儀をしたら」より簡単に委員会によって宗教として認められる可能性があった、と皮肉っぽく意見を述べました。¹²

宗教的な生き方は人間であると見なすことができるので、他人の信仰の自由を否定することは、他の人間の完全な人間性を否定することでもあります。したがって、宗教の定義という質問は単なる

学問的な問題ではありません。それは人間とは何であると見なされますか？ という質問と同じ程度に基本的なものです。

III. 宗教的信仰

しばらくの間、L. ロン ハバードは、サイエントロジーの信条と実践のために「宗教」という言葉を拒絶したようです。例えば、彼はかつてサイエントロジーをこのように観察しました。「精神療法ではありません。これは適切に使用されると、個人に自由と真実をもたらす知識です。」¹³しかしこの文脈において、ハバードは、信条、実践、会員資格のような、宗教の正規の側面と解放の真実を区別しているように見えます。このように「宗教」と「真実」を区別する方法は、一般的な宗教的戦略です。例えば、キリスト教の神学者カール・バルトは、自分の福音が宗教ではないと主張しました。それは真実でした。マウドゥディがイスラム教について、フランツ・ローゼンツヴァイクがユダヤ教について、そしてサルヴパッリー・ラーダークリシュナンがヒンドゥー教について同じ主張をしました。これらすべての例において、宗教思想家は、宗教と区別することによって、「真実」の究極の意味と力を主張してきました。¹⁴

しかし、ハバードは「宗教」という言葉が適切に定義されていれば、サイエントロジーの自由な真実を示すために使用できるということを発見しました。ハバードは「サイエントロジーは、最も古く、最も完全な意味での宗教である」と説明しました。しかし、サイエントロジーは単なる「宗教的な実践」だけでなく、「宗教的な英知」でもあります。¹⁵ハバードによると「宗教」という言葉には、「神聖な伝承、知恵、神と魂と精神の知識」が含まれます。¹⁶したがって、これらの条件でハバードはサイエントロジーを宗教として認識すべきだと主張しました。

ハバードは、ヒンドゥー教、仏教、道教が、この宗教の知恵のルーツであると特定しました。ヒンドゥー教の学派アドヴァイタ・ヴェーダンタのように、サイエントロジーはその人自身が究極的に、宇宙の神のパワーを持つ至高の存在であるという認識を支持しています。サンスクリット語の祭文の Vedanta (ヴェーダンタ) では、Atman (人間の自己) は Brahman (神) です。仏教の実践のように、サイエントロジーは仏教の「八正道 (はっしょうどう)」を思い起こさせる無知からの解放のための段階的な軌道を概説しています。この仏教の道は、正しい理解、献身、コミュニケーション、振舞い、生活様式、努力、意識、瞑想の段階を経て、俗世間から超越した喜びのある解放の状態を達成します。同様に、サイエントロジーは、解放への進展を定める宗教的な道筋またはブリッジを特定しています。しかし、仏教の道が通常の人間関係や職業から隔絶された修道生活に対する原理で設計されていた一方、サイエントロジーの道は、世の中で精神的な調和を達成するという道教のアプローチに、より共通するものでした。道教において、解放とは、人間がすべての存在条件と調和している状態です。サイエントロジーは、同類の調和の達成に向けられています。

したがって、これら古代アジアの宗教からの影響は、サイエントロジーの宗教的信仰の中で見付けることができます。しかし、ハバードは、これらの宗教の究極の目標である、精神の解放、知識、調

和が、実践で達成されることはめったにないと結論付けました。ハバードは、アジアでの旅行を振り返り、数多くの研究がありますが、ごく少数しか到達していないことを確認しました。ハバードによると、古代の宗教の道は「到達するのに必要な緊急性」の感覚が欠けていました。¹⁷現代の宗教は、精神的な目標を特定する以上のことをしなければならないと結論づけ、それを達成するための実用的な手段を提供しなければなりませんでした。

サイエントロジーはまた、グノーシス主義として知られる古代のキリスト教とユダヤ教の宗教的な動きの多くに共通しています。古代のグノーシス学のように、サイエントロジーは、人類が本質的に精神的存在であり、純粋な光の神の魂を持ちながら、物質世界の暗闇に巻き込まれていると教えています。その宇宙論において、サイエントロジーは3つの基本的側面を特定しています。**セータ**と呼ばれる生命力、無限とも呼ばれる至高の存在、そして頭文字MESTによって代表される物質、エネルギー、空間、時間の物質宇宙があります。生命力の個人化された形態としての、人間の魂である「セイタン」は、MESTの力ともつれ合っています。サイエントロジーの宇宙におけるドラマでは、物質宇宙にあるさまざまな状況のもつれからセイタンを解放することができます。

サイエントロジーは、生存の問題として、このセイタンの解放をもたらします。サイエントロジーの「八正道」は、生存に対する基本的な衝動であり、拡張の段階を表している「8つのダイナミックス」です。最初の4つのダイナミックスは、自分自身、家族、グループ、そして人類の「存在への衝動」です。次のふたつは生命力と物質宇宙のレベルでの生存への衝動です。第7と第8のダイナミックスを魂のレベルで究極の精神的生存を表します。ハバードが提唱したように、「より高いレベルの生存を目指して進むことは、神への歩みとも言えます。」¹⁸この意味で、8つのダイナミックスは、物質世界の限界から魂の解放のためだけでなく、至高の存在のレベルで存在することによって究極の神を達成するための道筋を描きます。

他の宗教と同様、サイエントロジー教会には基本的な信念を提示する正式な信条があります。この信条には4つの主要な面があります。第一に、サイエントロジーの信条は、基本的人権を強調しています。これらの人権は、存在のあらゆるレベルをまとめており、自由な精神的存在としての人間の魂の権利も表しています。すべての人間は、宗教、結社、思想、表現、生命、正気さ、自己防衛、生殖の自由に対する平等で侵すべからざる権利を持っています。これらの権利の究極的な性質を強調するために、信条は以下のように断言しています。「神にまで至らないいかなる力も、あからさまにせよ、密かにせよ、これらの権利を保留したり、顧みない権限を持っていないこと。」第二に、信条は、人間の心の宗教的治癒への献身を発表しています。その義務は「心の研究および精神的に引き起こされた問題の治癒が、宗教から引き離されたり、非宗教的分野で黙認されるべきではないこと」を信条の中で策定しています。第三に、信条は、「人は基本的に善である」という人生に対する倫理的方向付けを体現しています。その基本的な優しさは、他人との調和で実現されますが、「神の法律」は、他人の生

命、正気、または魂の生存を破壊するか、または減らす行為を禁じます。最後に、サイエントロジーの信条は、救いを達成する姿勢を表明しています。信条は「精神が救われ得ること、精神のみが身体を救い、あるいは治すことができることを」と締めくくられます。¹⁹

サイエントロジー教会で約束された救いは、この信条の原則を信じることに依存していません。ハバードが主張したように、信仰の問題は宗教の中で最も誤解されている側面のひとつです。彼は何かを「信じる」と「信仰」そのものの精神的な性質を区別しました。ある人が、宗教的信条、教会、救世主、何であれ、何かを「信じる」場合、その人は、精神的存在としての自由を他者のコントロールに委ねています。宗教の信条を「信じる」ことは、最終的に「自分の宇宙の犠牲」をもたらします。しかし、信仰そのものは、宇宙と神と調和する存在の精神的な状態です。この特定の意味において、信念は「存在性の完全な状態にあり、この状態があつて自分自身の宇宙の内に『信念』そのものを生じさせることができたり、人々に自身に対する信念を持たせたりすることができるのです。」²⁰サイエントロジーは無条件の信仰を達成することに向けられています。信条の問題以上に、信仰とは具体的な行動を通じて得られる自由な知識です。

IV. 宗教儀式

他の宗教と同様、サイエントロジー教会は儀式を構成する、一定に繰り返される特別な種類の宗教行為を実施します。確かに、サイエントロジーの儀式の中には、他の宗教で馴染み深い実践を思い起こさせる式典があります。叙任されたサイエントロジー聖職者は、結婚式、洗礼式（サイエントロジーでは「命名式」と呼ばれる）、および葬式のために教会が定める儀式を執り行います。彼らはサイエントロジーの礼拝の場で定期的な日曜サービスも行います。しかし、サイエントロジー教会で、これらの儀式は、それ自体で終わりではありません。彼らは、サイエントロジーの自由な知識を強化するための正式な機会を提供します。L. ロン ハバードは次のように説明しています。「サイエントロジーの教会礼典では、私たちは祈りや、敬虔（けいけん）の姿勢や、断罪の脅しなどは用いません。私たちが用いるのは、サイエントロジーの科学で発見された事実、真実、そして理解です。私たちは聖書（あるいはコーランや律法やヴェーダの賛歌）を読まず、そこに集まった人々に『これはあなたが信じなければならないものです』とは言いません。」²¹また、サイエントロジーの目的は、人格神、神聖な文章、または宗教的实践の中で信心深い信仰を育てることではありません。その目的は宗教的知識を達成することです。

この自由な知識に向かう道のりで、サイエントロジー教会の中心的儀式の実践は、オーディティングと呼ばれています。オーディティングとは、「聞く」という意味のラテン語の「audire」から来ており、新信者を慎重に聴き、進行状況を監視する経験豊かなオーディターによって行われるセッションのことです。この実践を支持する理論は、人間が情報を処理する分析心と、過去からの痛みを伴うすべての経験の記憶を保管する、反応心を持っていることを裏付けています。これらの経験の多

くはトラウマ的であったため、反応心は深い痕跡または心理的傷跡を有し、これは**エンGRAM**と呼ばれます。これらの心理的障害は、以前の人生経験、出生前の経験、過去の生涯から埋め込まれてきました。エンGRAMは反応心の中に埋め込まれていますが、意識的な意識に導かれ、オーディティングを通じてクリアにされます。このプロセスの補助器具として、エレクトロサイコメーター (Eメーター) は、反応心に関連する心理的チャージを測定するために、オーディティング・セッションで使用されます。サイエントロジー用語において、Eメーターは聖職者カウンセリングのセッションで使われる宗教上の用具です。オーディティングを通して、エンGRAMが解き放たれ、サイエントロジストがクリアと呼ぶ存在の状態になります。

それは特定の精神力学的理論と方法を引き出すものですが、オーディティングは宗教的治癒、告白、瞑想の特徴を組み合わせた儀式的実践として理解することができます。

第一に、オーディティングは儀式的な治療として理解することができます。宗教歴史家としてジョナサン・Z. スミスはかつて観察しました。「治癒を行えない宗教は長く存続することはできない。」²²現代社会では、宗教的伝統が身体と心を癒す責任を科学的な医療専門家に委ねてきました。しかし、他の「新宗教運動」と同様、サイエントロジー教会は、この宗教的な治癒機能を取り戻すために働いています。特に、サイエントロジーの実践は、精神的な治癒を達成することに向けられており、心と身体の健康と幸福にプラスの影響を与えることができます。

第二に、オーディティングには、告白という宗教儀式の特徴の多くがあります。悔い改め、司祭への告白、贖罪 (しょくざい) 行為が重要な儀式サイクルを形成する、ローマ・カトリックの慣行の身近な特徴として、告白は仏教における儀式としても現れます。仏教の経典であるパーリ律の『大品 (Mahavagga)』(だいほん) によれば、もし誰かが「罪を犯したことを思い出して、再び純粋であることを欲するならば、自分が犯した罪を明らかにし、それが明らかになったら、すべてがうまくいくようになる。」²³したがって、仏教儀式では、精神的に純粋な状態 (サイエントロジストがクリアとする、いくつかの点で同類のもの) は、過去の思い出を再考し、告白を通じてそれらを明らかにする必要があります。

第三に、オーディティングの実践、特に「ソロ・オーディティング」の上級の段階では、瞑想という、より伝統的な宗教儀式が思い起こされます。例えば、仏教の実践では、儀式の補助器具が注意を集中させるためによく使われます。瞑想者は、意識の明瞭さを高めるために、視覚的なデザイン、神聖なトーン、または不可解な謎に集中することができます。頻繁に、瞑想は新信者の進行を観察する教師によって監視されます。

サイエントロジーはオーディティングに加えて、勉強活動の宗教的次元を修復する教育プログラムとしてトレーニングを提供します。多くの宗教的伝統において、集中的な教典の勉強は重要な宗教儀式です。例えば、ユダヤ教のイエシャヴァでは、タルム派の師匠の監督の下での教典の勉強は、儀式の特徴のすべてを有する宗教活動として明白に理解されます。同様に、サイエントロジーのトレーニングには、重要な宗教活動として、聖職者の監督のもと、教典を使った集中的な取り組みが含まれています。サイエントロジー教会が癒しの宗教的機能を回復しようとしたように、訓練された勉強活動の宗教的意義を取り戻すことに取り組んできました。

V. 宗教倫理

すべての宗教は、日常的で通常の状態および私生活や社会生活の状態における行動を導く倫理的規則、倫理的基準、および倫理的価値を育成します。サイエントロジー教会には、宗教倫理制度もあります。行動指針は、一連の倫理規定で策定されています。サイエントロジストの規律は、道徳的振舞いの基本原則を概説します。オーディターの規律は、サイエントロジー聖職者の行いを統制する聖職者の実践のための倫理的行動指針を提供します。そして名誉の規律は、すべてのサイエントロジストが望むことができる倫理的理想を定めます。これらの規律は、個人の振舞いを統制するだけでなく、狂気や犯罪がなく、戦争のない世界を約束する社会変革の基礎とみなされます。

しかし、これらの倫理規定は、倫理的行動が精神的成長の不可欠な部分とみなされる宗教倫理に特有なアプローチです。倫理的な振舞いは、精神的な解放へと進歩する、直接的な結果と見なされます。したがって、この点で倫理は、サイエントロジー教会のすべての宗教的信仰と儀式に密接に関連します。

人間は本質的に善だと仮定すると、サイエントロジストは彼らが悪いことができることも認識しています。しかし、人間が行う邪悪な行為は、人間の本質的な善の逸脱とみなされます。この観点から、サイエントロジーの中心的な倫理的要請は、倫理的な逸脱を修正し、人間の精神の本来の善良さを回復することです。本質的に、宗教倫理は、倫理的調和の原始的な条件を回復させる問題となります。

宗教の歴史において、宗教倫理のシステムは、単に特定の行動に取り組むだけではありません。それらは単に嘘や窃盗、殺人などの行為やその他の行為を禁止するだけではありません。むしろ、宗教倫理は、欲望の性質と呼ばれるものに取り組んできました。例えば、キリスト教の伝統において、中世の神学者は、7つの致命的な罪として、プライド、怒り、色欲、怠惰、強欲、大食、羨望の基準となるリストを策定しました。しかし、これらの罪は具体的な行動ではありませんでした。それらは人間を神から遠ざけるようにし向ける欲望の性質でした。イタリアの詩人ダンテ・アリギエーリが「神曲」で述べたように、これらの罪は、同じ「見当違いの恋」の7つの異なる形でした。²⁴ダンテによれば、誤った方向の欲求は、天球の天体的調和を調整した神の愛から人類を遠ざけました。したがって、宗教倫理は、究極的に精神的な不協和を精神的な調和に変えることに依存していました。

同様に、仏教倫理は、3つの致命的な罪として、色欲、強欲、怒りの感情を特定し、欲望の形態としても理解できます。この場合、誤った方向の欲望は、ブッダの本質の純粹さと自由とは調和しません。したがって、キリスト教と仏教の両方の伝統は、人間の欲望を精神的理想と調和させる問題として、宗教倫理を理解してきました。²⁵

サイエントロジーの倫理は、人間の欲望の性質における不協和と調和の関係の同様の分析に基づいています。この倫理的分析は、トーン・スケールで最も明確に公式化されています。トーン・スケールは、0から40までのスケールで、さまざまな行動フローの特性から精神的な性質を示しています。スケールの底辺である、無関心や絶望という欲望の非常に低い性質は、死に非常に近いので、倫理的行動の基礎を提供しません。少し高くなり、恐怖、怒り、敵意などの性質は、倫理的な生活を送るために必要な自由を抑制します。次の領域では、保守的から、人生への強い興味、快活の状態へと移行する際にスケールが明らかに上昇していきます。今や倫理的な振舞いが可能になります。しかし倫理的行動を取る範囲は、スケールが熱狂、美的な参加、高揚へと上昇し、すべての行動の源と至高の存在性の静穏の性質を表す最高レベルへと上昇するに従い、飛躍的に拡大します。

したがって、トーン・スケールとは、サイエントロジーの精神的な理想と人間の欲望の性質との相対的な不調和や調和を評価するための用語を示します。L. ロン ハバードはこう付け加えています。「トーン・スケールを下がるにつれて、不協和音がセータに入り込み、それがだんだん大きくなっていくと考えることができます。…音楽に例えると、音の振動がだんだんと純粹さと調和を失っていき、ますます調子が外れていく様子だと言えるでしょう。」²⁶したがって、サイエントロジーの宗教的倫理において、倫理的な行動は、人間の精神を元の精神的調和の状態に戻すことに懸かっています。

VI. 宗教的経験

宗教史家ミルチャ・エリアーデによると、宗教的経験の最も古い形態は、シャーマニズムの実践に見られます。エリアーデは、「エクスタシーの古めかしいテクニック」と呼ぶものを利用して、シャーマンはトランス状態に入り、身体から出て行くと主張し、身体、心、精神を癒すための特別な経験によって得た力を行使します。²⁷世界各地の地方の小規模な先住民の宗教において、シャーマンは宗教経験の本質を定義するための基準を示します。

しかし、人類学者フェリキタス・グッドマン²⁸が主張してきたように、シャーマニズムのテクニックは、古代から最も持続的で永続的な宗教的経験であるトランスを生み出しました。宗教によっては瞑想、祈り、唱歌、歌、踊りなどのさまざまなテクニックを通じて、トランス状態の経験を促して培いました。グッドマンによれば、トランス状態は、すべての宗教的経験の根底にある共通項を表します。グッドマンの言葉によると、すべての宗教は、それを知っているか否かに関係なく、トランスの経験を誘発します。

サイエントロジー教会は、「宗教技術」と呼ばれる特定の「エクスタシーのテクニック」を採用していますが、教会は一貫して、これらの実践によって支えられている宗教的経験がトランスとして誤解されるべきではないと主張してきました。さらに、反カルトのプロパガンダの不名誉な主張とは対照的に、これらのテクニックは催眠や「洗脳」のプロセスとは関係がありません。²⁹ 代わりに、サイエントロジー教会で使用される宗教的テクニックは、精神的意識のより明確な体験に向けられます。

サイエントロジーにとって、宗教的経験は基本的に理解を達成することです。理解の本質は、「ARCの三角形」として表され、親愛の情、現実性、コミュニケーションという3つの構成要素から成ります。この三角形の最初の角、「親愛の情 (Affinity)」は、他人との関係で経験される親近感、愛情、あるいは好意の度合いを指します。2番目の角、「現実性 (Reality)」は、どのような状況でもそのように見えるものについて対人関係の同意を示します。3番目の角、「コミュニケーション (Communication)」は、考えのやり取りと定義します。このARC三角形の最も重要な部分として、明確なコミュニケーションは、対人関係における親愛の情と現実性についての共通の同意を生み出す基礎を提供します。しかし、理解の三つの側面は相互に関連しているので、ARCの三角形は、理解が増すにつれて成長すると説明されます。理解の本質を理解するための公式として、ARCの三角形は、意識の拡張の目安として機能します。

サイエントロジーにおける宗教的経験は、一連の段階的レベルを経て進みます。反応心の条件付けから、必要な「リリース」を達成することで、人はクリアーという状態を達成することができます。サイエントロジー教会によれば、「クリアーの状態の素晴らしさは、私たちの文化に存在する書物に述べられているものとは全く比べものになりません。」³⁰したがって、一般に神秘的な経験のように、クリアーであることの経験は、言葉を越えた意識の状態として、不可解なものとして記述されることがあります。しかし、神秘的な経験のように、その意識状態は、新しい知識と洞察が得られるという意識の高まりを特徴とします。

クリアーの状態を超えて、サイエントロジーは、より高い精神的自由と能力を達成するためのテクニックを提供します。「機能しているセイタン」として、これらのより高いレベルを経験している人は、「人生、思考、物質、エネルギー、空間、時間に対して、意識的かつ自発的に起因である」と言われます。³¹「機能しているセイタン (Operating Thetan)」に対して特別な能力が主張されています。例えば、「機能しているセイタン」は、シャーマンのように身体から独立して意識している意識を体験できるとされています。しかし、これらのより高いレベルで、「機能しているセイタン」によって回復された主な能力は永遠の経験です。そういった経験を通して、人は不滅、そして生と死のサイクルからの解放の知識を得ます。機能しているセイタンが示す精神的な知識、自由、そして力は、サイエントロジー宗教の究極の目標です。本質的に、これらの能力は精神的な救済と不滅性という宗教的探求の集大成を示します。

VII.宗教団体

サイエントロジー創立教会は1955年7月21日、ワシントンDCで教団として形成され、「サイエントロジーとして知られる宗教的信仰の繁栄とその信仰に対する宗教的崇拝のための教会として行動する」ことを目的としています。その後30年間、サイエントロジー教会は劇的に拡大して世界規模の宗教になりました。他の宗教と同様に、サイエントロジー宗教は特定の礼拝場所に定着しています。国際サイエントロジー教会の社会組織は、5種類の宗教施設のカテゴリーに基づきます。

まず、サイエントロジー・ミッションは、入門サービスとクリアーのレベルまでのオーディティングを提供します。ミッションは主にサイエントロジーに精通していない人々への接触に関与していますが、「ブリッジへのすべての基本のルート」を提供する権限も与えられています。ミッションが十分な大きさを達成すると、教会になることができます。

第二に、サイエントロジー教会は、ミッションで利用できるすべてのオーディティング、トレーニング、その他の宗教サービスを提供します。しかし、教会はオーディターの上級のトレーニングを提供し、聖職者を叙任する権限もあります。定期的な日曜礼拝が行われます。

第三に、セントヒル教会と上級オーガニゼーションは、上級のオーディティングとトレーニングのための宗教施設です。これらの施設は、サセックス州、コペンハーゲン、ロサンゼルス、シドニーにあり、機能しているセイタンの最初のレベルを達成するための宗教技術を専門としています。

第四に、フロリダ州クリアウォーターにあるフラッグ・サービス・オーガニゼーションは、国際サイエントロジー教会の精神のための拠点です。この施設では、サイエントロジーのあらゆる宗教サービスを提供しています。これには、機能しているセイタンとしてのトレーニングのレベルが高く、オーディターのための最高レベルのトレーニングが含まれます。

第五に、カリブ海に拠点を置く440フィートの船、フリーウィンズ号船上でサービスを実施するフラッグシップ・サービス・オーガニゼーションは、最高水準のオーディティングを提供する唯一のサイエントロジー施設です。さらに、フラッグシップ・サービス・オーガニゼーションは、精神的な進歩のための特別コースと宿泊施設を提供しています。

この宗教施設の階層は、ロサンゼルス之母教会、国際サイエントロジー教会の権限のもとで機能します。サイエントロジー宗教を保護し広める責任を担う国際サイエントロジー教会は、いくつかの付随する部門を設立しました。ゴールドデン・エラ・プロダクションズは広範な出版物、フィルム、録音物を制作し、普及します。ふたつの出版社、ロサンゼルスのブリッジ・パブリケーションズとデンマークのニュー・エラ・パブリケーションズは、L. ロン ハバードの書籍の出版を取り扱います。現

代的な企業形態のようですが、この教会組織は世界中のサイエントロジー宗教の保護と拡張を監督し、宗教上の利益を提供します。

リリジャス・テクノロジー・センターは、教会の神聖な経典と宗教的な教えの保存に専念し、サイエントロジーの商標と著作権の使用を登録し監督します。宗教の正統性を守るために、リリジャス・テクノロジー・センターは、その教えの純粋さを維持し、教会の聖職が倫理的に行われるようにします。

教会階層の外部組織として、スピリチュアル・テクノロジー教会 (Church of Spiritual Technology) は、L. ロン ハバードの文書を不滅の資料として保存することで、宗教の存続を確実にするために1982年に設立されました。これらの著作が神聖な教典と見なされていることを示すように、スピリチュアル・テクノロジー教会は、ハバードのテキストをステンレス板に刻み込み、チタン容器に保存するためにさまざまな手段を開発し、サイエントロジー宗教の基礎資料の永続的な保存を保証します。このようにして、スピリチュアル・テクノロジー教会は、「未来の世代、さまよえる野蛮人の部族のために、この先何千年にもわたって考え得るどんな大惨事からも、この宗教を復活させる教典を持てるように」サイエントロジーの神聖な教典を守る責任を引き受けました。³²

サイエントロジー教会は、その宗教技術を保護し、広めることに加え、薬物リハビリ、犯罪者の更生、経営管理、教育の分野で幅広い公共サービスを展開してきました。ナルコノン (Narconon) は薬物使用を減らすためにサービスと支援を提供します。クリミノン (Criminon) は有罪判決を受けた犯罪者と協力して刑務所に再び戻らないようにします。しあわせへの道 (The Way to Happiness) プログラムは個人の道徳観や社会倫理観の開発を支援します。アプライド・スカラスティックス (Applied Scholastics) は勉強や学習方法で教育プログラムを提供します。これらのプログラムやその他のプログラムを通して、サイエントロジー教会はその宗教的使命を社会サービスにまで広げています。

しかし、サイエントロジー教会の焦点は、その宗教的使命に残っています。L. ロン ハバードが意図した通り、サイエントロジーは世界中の宗教団体に基づいて計画されました。すべての「新宗教運動」が宗教として同一視されるべきではありません。例えば、マハリシ・マヘーシュ・ヨーギーによって設立された超越瞑想 (Transcendental Meditation) は、それが宗教ではないと主張しました。それはストレスを軽減するために純粋に科学的技術を提供した世俗的な組織でした。³³しかし、サイエントロジーは宗教団体としての地位を常に明確にしてきました。その地位は、世界各地の政府が宗教に対して認める法的承認と税控除をこの教会に与えたことで確約されています。

VIII. 南アフリカにおけるサイエントロジー

1970年代初め、アパルトヘイト政府は、南アフリカでサイエントロジー教会の宗教的地位を否定しようと試みました。政府の調査委員会は、サイエントロジーは聖書を神の言葉として説教していなかつ

た、それは罪と改心の「健全な教義」を促進しなかった、人類の唯一の救い主としてのキリストを公言しなかったため、「真の教会」として認識されるべきではないと主張しました。この調査委員会はサイエントロジーの禁止を奨励しないことを決定しましたが、サイエントロジー教会には南アフリカの教会や宗教として数えられるのに必要な「神聖さ」が欠けていました。³⁴

皮肉なことに、この公式委員会は、南アフリカへの支援を提案した宗教運動の合法性を認めることを拒否しました。サイエントロジー教会が委員会への返答で指摘したように、教会と創設者は「南アフリカの原因を擁護するのに積極的」でした。³⁵サイエントロジー教会は原則的に非政治的宗教であり、いかなる政治的な信念や関与する人々にも開かれた教会でしたが、L. ロン ハバードは国際共産主義との戦いにおいて南アフリカに対する支持を表明しました。1961年にハバードは「恐らく、世界で唯一、破壊と真に戦う意志を持つ国は、南アフリカでしょう」と書きました。しかし、ハバードは、軍事的解決策の代わりに、サイエントロジー教会の宗教技術を提供しました。「この流れを変えるには、銃ではなく、Eメーターを使う」ように奨励しました。³⁶

1960年代の初め、南アフリカを巡ったL. ロン ハバードは、この国と国民に明確な関心を示しました。サイエントロジー教会の標準的な参考資料として、「1960年代初めに南アフリカを訪問した後、彼は大規模な社会の混乱と、黒人社会と白人社会の間での深刻な亀裂を予測しました。災害を避けるために、彼は対策を勧告し、この国の大多数の黒人の識字率を高める技術を提供しました。³⁷ 1975年にサイエントロジーの法的承認に合わせて、教会は南アフリカで勉強の技術を利用できるようにするため、アプライド・スカラスティックスの国際プログラムの関連組織「エデュケーション・アライヴ」を設立しました。サイエントロジー教会によると、「南アフリカでは、これらのプログラムは、200万人以上の貧困層のアフリカ黒人が、アパルトヘイトの壁が崩壊する前、あるいは世界が気付く前に、勉強能力を向上させるのに役立ちました。」³⁸

アパルトヘイト時代を通じて、教会はバンツール族の教育、メンタルヘルス関係者による人権侵害に対する激しい抗議キャンペーンに積極的に参加しました。教会が主張したように、精神医学は、人種分離を正当化し、南アフリカ黒人の人種差別的抑圧を強化するために、アパルトヘイト勢力に役立ちました。教会は、精神病院における黒人患者の非人道的治療を特定し、摘発することに奮闘しました。このキャンペーンによって、教会はアパルトヘイト政府と戦うことになりましたが、南アフリカのメンタルヘルス専門家の人種差別に対する懸念は、1977年に世界保健機構 (WHO) によって表明されました。「南アフリカの医学分野において、人種差別によって培われた人間蔑視を正確に言い表しているものは精神医学以外にはない。」³⁹教会の精神医学に対する反対は、精神的健康と治癒の宗教的根拠を確認する信念から生まれます。しかし、南アフリカの状況において、この反対はアパルトヘイト下での精神医学の実践に浸透しているような、特有の人種差別に対して向けられました。

これらの宗教的および教育的イニシアチブを通じて、サイエントロジー教会は南アフリカの宗教の中でその地位を確立しました。近年、この教会は世界宗教平和会議 (WCRP) の南アフリカ支部に積極的に参加してきました。⁴⁰ 南アフリカの宗教団体の権利と責任の憲章を作成する際、WCRPは教会の宗教の自由に対する関与によって支持されてきました。したがって、新しい南アフリカで、サイエントロジー教会は、この国の豊かな宗教的多様性の中に位置付けられています。

哲学者ウィリアム・ジェームズが抱いていたように、すべての宗教は治療の意図を持っています。すべての宗教は、その問題が罪、無知、苦しみ、疎外、抑圧のいずれであるかを問わず、人間の状態の基本的な問題を診断し、治療を提案します。⁴¹ サイエントロジー教会は、人間の状態の問題を診断し、その問題を治療するように設計された精神的治療と応用宗教哲学の特定のテクニックを提供する治療的宗教です。

サイエントロジーは「新宗教運動」とよく言われますが、実際には新しいものではありません。サイエントロジーは南アフリカですでに40年間存続してきました。1980年代の初め、サイエントロジーの衰退を予測していた社会学者や歴史学者がいました。彼らは、教会が創設者の死によって存続することが困難になるだろう。その宗教「科学」は科学の潮流を変えることによって時代遅れになるだろう。その精神「療法」は拡大する競争によって「市場シェア」を失うだろうなどと主張しました。⁴² しかし、その間にサイエントロジーの崩壊の予測は確認されていません。古くもあり新しくもある宗教として、サイエントロジー教会は宗教的願望を進展させ続け、世界中で信奉者を獲得してきました。最も控え目に言ったとしても、サイエントロジー教会は南アフリカにおいて引き続き宗教として認可され、認識されるに値します。

デビッド・キデスター
比較宗教学教授

IX. 参照ノート

1. Church of Scientology, *A Description of the Scientology Religion* (Los Angeles: Church of Scientology International, 1993): 2.
2. E.B.Tylor, *Primitive Culture*, 2 vols. (London, John Murray, 1920): I:424; Emile Durkheim, *The Elementary Forms of the Religious Life*, trans. Joseph Ward Swain (New York: The Free Press, 1965): 62. A useful multi-dimensional “map” for the study of religion has been developed by Ninian Smart in a number of publications, including *The Religious Experience of Mankind* (Glasgow: Collins, 1971); *The Science of Religion and the Sociology of Knowledge* (Princeton: Princeton University Press, 1973); *The Phenomenon of Religion* (London: Macmillan, 1973); and *Worldviews: Crosscultural Explorations of Human Beliefs* (New York: Charles Scribners, 1983). For further discussion of defining religion, see David Chidester, Gordon Mitchell, Isabel Apawo Phiri, and A.Rashied Omar, *Religion in Public Education: Options for a New South Africa*, 2nd edn. (Cape Town, UCT Press, 1994).
3. Emile Benveniste, *Indo-European Language and Society* (trans.) Elizabeth Palmer (London: Faber and Faber, 1973; orig. edn. 1969): 522.
4. J.T. van der Kemp, “An Account of the Religion, Customs, Population, Government, Language, History, and Natural Productions of Caffraria,” *Transactions of the {London} Missionary Society*, Vol.1 (London: Bye & Law, 1804): 432.
5. W.M.Eiselen, “Geloofsvorme van Donker Afrika,” *Tydskrif vir Wetenskap en Kuns* 3 (1924/25): 84.
6. Peter Harrison, *‘Religion’ and the Religions in the English Enlightenment* (Cambridge: Cambridge University Press, 1990): 39.
7. David A.Pailin, *Attitudes to Other Religions: Comparative Religion in Seventeenth- and Eighteenth-Century Britain* (Manchester: Manchester University Press, 1984).
8. F.Max Müller, *Introduction to the Science of Religion* (London: Trübners, 1873).
9. In addition to the work of Harrison and Pailin cited above, recent accounts of the historical emergence of the modern terms “religion” and “religions” have also been

provided by Peter Byrne, *Natural Religion and the Nature of Religion: The Legacy of Deism* (London: Routledge, 1989); J. Samuel Preus, *Explaining Religion: Criticism and Theory from Bodin to Freud* (New Haven: Yale University Press, 1987); Eric J. Sharpe, *Comparative Religion: A History*, 2nd edn. (La Salle, Illinois: Open Court, 1986); and Michel Despland and Gerard Vallée (eds.) *Religion in History: The Word, the Idea, the Reality* (Waterloo, Ont.: Wilfrid Laurier University Press, 1992). For deep background, see Wilfred Cantwell Smith, *The Meaning and End of Religion* (New York: Macmillan, 1962); Michel Despland, *La religion en Occident: Evolution des idées et du vécu* (Montreal: Fides, 1979); and Ernst Feil, *Religion: Die Geschichte eines neuzeitlichen Grundbegriffs vom Frühchristentum bis zur Reformation* (Göttingen: Vandenhoeck and Ruprecht, 1986). For an analysis of the historical production of the terms “religion” and “religions” in southern Africa, see David Chidester, *Savage Systems: Colonialism, Religion, and Comparative Religion in Southern Africa* (Charlottesville: University Press of Virginia, forthcoming 1996).

10. On the anti-cult movement, see David Bromley and Anson D. Shupe, *The New Vigilantes: Deprogrammers, Anti-Cultists, and the New Religions* (Beverly Hills, California: Sage, 1980). In academic analysis, anti-cult claims can reappear in theoretical models that depict new religions as psychopathology, entrepreneurial enterprises, or social deviance. See William Sims Bainbridge and Rodney Stark, “Cult Formation: Three Compatible Models,” in Jeffrey K. Hadden and Theodore E. Long, eds., *Religion and Religiosity in America* (New York: Crossroad, 1983): 35–53.
11. G.P.C. Kotzé, et al., *Report of the Commission of Inquiry into Scientology for 1972* (Pretoria: Government Printer, 1973): 208.
12. G.C. Oosthuizen, *The Church of Scientology: Religious Philosophy, Religion, and Church* (Johannesburg: Church of Scientology, 1975): 11.
13. L. Ron Hubbard, *The Creation of Human Ability: A Handbook for Scientologists*, 351.
14. For an example of this approach, see Hendrik Kraemer, *The Christian Message in a Non-Christian World* (London: Edinburgh House Press, 1938).
15. L. Ron Hubbard, *Phoenix Lectures* (Edinburgh: Publications Organization World Wide, 1968): 35.

16. *Ibid.*, 13.
17. *Ibid.*, 11.
18. L. Ron Hubbard, *Science of Survival: Prediction of Human Behavior*, 488.
19. L. Ron Hubbard, *Scientology 0-8: The Book of Basics*, 410.
20. L. Ron Hubbard, *Scientology 8-8008*, 121.
21. Hubbard, *Ceremonies of the Founding Church of Scientology*, 7.
22. Jonathan Z. Smith, "Healing Cults," *New Encyclopaedia Britannica, Macropaedia*, vol.8 (Chicago, 1977): 685.
23. Henry Clarke Warren, trans., *Buddhism in Translations* (New York: Atheneum, 1979): 405.
24. Morton Bloomfield, *The Seven Deadly Sins: An Introduction to the History of a Religious Concept* (East Lansing: Michigan State University Press, 1967).
25. On dissonance and harmony in religious ethics, see David Chidester, *Patterns of Action: Religion and Ethics in a Comparative Perspective* (Belmont, Calif.: Wadsworth, 1987): 67-105.
26. Hubbard, *Science of Survival*, 46.
27. Mircea Eliade, *Shamanism: Archaic Techniques of Ecstasy*, trans. Willard R. Trask (Princeton: Princeton University Press, 1964).
28. Felicitas Goodman, *Ecstasy, Ritual, and Alternative Reality: Religion in a Pluralistic World* (Bloomington: Indiana University Press, 1988); *Where the Spirits Ride the Wind: Trance journeys and other Ecstatic Experiences* (Bloomington: Indiana University Press, 1990).
29. For analysis that has discredited the claim that new religions engage in "brainwashing," see David Bromley and James Richardson, eds., *The Brainwashing/Deprogramming*

- Controversy: Sociological, Psychological, Legal, and Historical Perspectives* (New York: Edwin Mellen Press, 1983); and Dick Anthony, “Religious Movements and Brainwashing Litigation: Evaluating Key Testimony,” in Thomas Robbins and Dick Anthony, eds., *In Gods We Trust: New Patterns of Religious Pluralism in America*, 2nd edn. (New Brunswick, New Jersey: Transaction, 1990): 295–325.
30. Church of Scientology, *What Is Scientology?: The Comprehensive Reference on the World’s Fastest Growing Religion* (Los Angeles: Bridge Publications): 245.
 31. *Ibid.*, 274.
 32. Church of Scientology, *Description of the Scientology Religion*, 8.
 33. David Chidester, *Patterns of Power: Religion and Politics in American Culture* (Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice Hall, 1988): 239–41.
 34. Kotzé, *Report of the Commission of Inquiry*, 209.
 35. Church of Scientology, *Reply to the Report of the Commission of Inquiry: “The Missing Report” for the Information of Members of Parliament* (Johannesburg: Church of Scientology, 1973): 41.
 36. Cited in *Ibid.*, 43.
 37. Church of Scientology, *What Is Scientology?*, 527.
 38. Church of Scientology, *Reference Guide to the Scientology Religion: Answers to Questions Most Commonly Asked by Media* (Los Angeles: Church of Scientology International, 1994): 22.
 39. Citizens Commission on Human Rights, “Psychiatry and South Africa,” *Creating Racism: Psychiatry’s Betrayal in the Guise of Help* (Los Angeles, CCHR, 1995): 18.
 40. Klippiess Kritzing, ed., *Believers in the Future* (Cape Town: World Conference on Religion and Peace, South African Chapter, 1991).

41. William James, *The Varieties of Religious Experience* (New York: Macmillan, 1961): 393.
42. Roy Wallis, "Hostages to Fortune: Thoughts on the Future of Scientology and the Children of God," in David G. Bromley and Phillip E. Hammond, eds., *The Future of New Religious Movements* (Macon, Georgia: Mercer University Press, 1987): 80–84; Robert Ellwood, "A Historian of Religion Looks at the Future of New Religious Movements," in *ibid.*, 249–50; Benton Johnson, "A Sociologist of Religion Looks at the Future of New Religious Movements," in *ibid.*, 253–56.

